保育学生が園児から受けたプライベートゾーンに関する言動・行動と対応の実態　第1報
～ 特別講義を受講するまでについて ～

Student Teachers' Reactions to Children's Words and Behaviors Concerning Privates Zone

（2005年3月31日受理）

原田　眞澄　　西尾　敏子
Masumi Harada　　Toshiko Nishio

Key words：園児・性の健康教育・プライベートゾーン・保育

要　　旨

保育学生2年次生155名を対象に，アンケート調査を行った。約半数の学生は，ボランティアや実習で園児のプライベートゾーンに関する言動や行動を体験していた。これは，幼児に性の健康教育をする絶好のチャンスであるが，保育学生にはそういう意識が乏しく適切な対応ができにくいことがわかった。近年，幼児期から性の健康教育を始める必要性が認識されている。保育士は幼児期の子どもと密接な関わりをもつことから，その養成課程で今日的な性の健康教育のあり方について教育を行う必要性を感じた。

は　じ　め　に

平成12年（2000年）11月に施行された児童虐待防止法では，児童虐待を保護者がその監護する児童に対して行う「身体的な暴行」「わいせつな行為」「ネグレクト」「心理的に傷つける言動」であるとしている。児童虐待の報告件数は急増の一途をたどっているが，その内訳は「身体的な暴行」と「ネグレクト」が圧倒的に多い。それは，子どもが衰弱してきたり，あざや傷ができるなど発見しやすいからではないだろうか。「わいせつな行為」「心理的に傷つける言動」はそれとは対照的で容易に発見しにくく，遷延化・長期化しやすい。なかでも性的虐待は，生涯にわたり心身両面に深い傷を負わせ，さまざまな問題に波紋を広げる残酷なものである。早期発見はもちろん，これを未然に防ぐための対策を充実させることが肝要である。従来は思春期になってから始められていた性に関する教育であるが，今は幼児期に行われるべきだという考え方がみられるようになった。

そこで，中国短期大学保育学科（以下「本科」と称す）でも，時代のニーズにそった保育士養成を目指し，平成16年度から特別講義「子どもへの性の健康教育のあり方」を2年次生対象に実施することになった。講義内容は，表1のとおりである。「保育者として園児に伝えるべきことは何か？」「具体的にはどのような伝え方をすれば良いのか？」という内容とした。特に，プライベートゾーンは人間にとって大切な部分であり，他人から勝手に触られてはならない部分であることを強調し，これは園児と保育者の関係でも適用されるルールであることを伝えた。

特別講義の中で調査したところ，驚くべきことに，過半数の学生は園児からの性的な言動や行動を体験していた。そして，どのように対処すればよいのか知らなかったという理由で，絶好の性教育のタイミングでありながらあいまいなままにしてしまっている現状があった。幼児の性を健康に保つためには，理解力に応じた性の健康教育が必要になるが，保育学生にはその意識そのものが乏しく適切な対応につながらないことがわかった。

そこで，本研究では保育学生の実態を明らかにし若干

の考察を加え，今後の講義を整理精選するための基礎的資料としたいと考える。

表１．平成16年９月24日実施　授業計画

1　性の健康教育の必要性 　1）性の健康について学ぶ場の現状 　2）性の健康に関する社会問題の現状 2　性の健康教育のポイント 3　就学前の子ども達の特徴と性の発達課題 4　就学前の子ども達の特徴と性の健康教育の内容 　・プライベートゾーン 　・性器の名称 　・赤ちゃんの始まり 　・コンドーム

講義内容はメグヒックリングの理論を基盤としたものである。

１．目　　的

保育学生が園児から受けたプライベートゾーンに関する言動と行動の実態を明らかにする。また，保育学生の対応法の実態を明らかにする。

２．方　　法

期間：平成16年９月24日

対象：本科２年生155名

方法：平成16年９月24日に特別講義「子どもへの性教育のあり方」を実施し，講義終了時アンケート調査し留め置き法で１週間後回収した。

質問内容：１）園児から受けたプライベートゾーンに関する言動と行動

２）それに対する感じ方と対処方法

倫理的配慮：アンケートは無記名とし，調査への協力は任意とした。

（用語の定義）

プライベートゾーンとは，口・胸・性器（殿部を含む）の３ヵ所とする。

３．結　　果

アンケート回収率：86.5%，有効回答率81.9%。対象の属性：（性別）女性117名，男性10名（年齢層）19歳～38歳

１）園児から受けたプライベートゾーンに関する言動・行動について

実習やボランテア活動を通じて，54.3%もの学生が園児からプライベートゾーンに関する言動・行動を体験していた（図１）。胸に関するもの59人，性器に関するもの27人，口に関するもの4人であった。

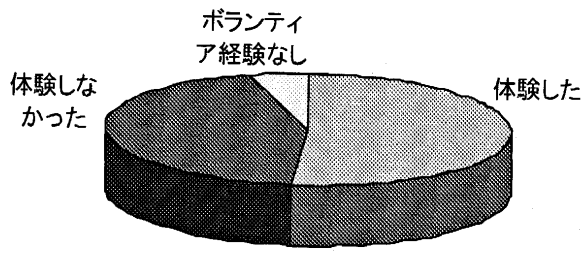

図１．園児から性的な言動・行動を受けた割合

（１）　胸に関する体験

胸に関する体験を持つ59人のうち，胸を触られた体験（48人）が最も多かった。次いで，胸をもまれた（４人），服の中を覗かれた（２人）の順であった。胸に関する言動を体験していたのは，５人であった。

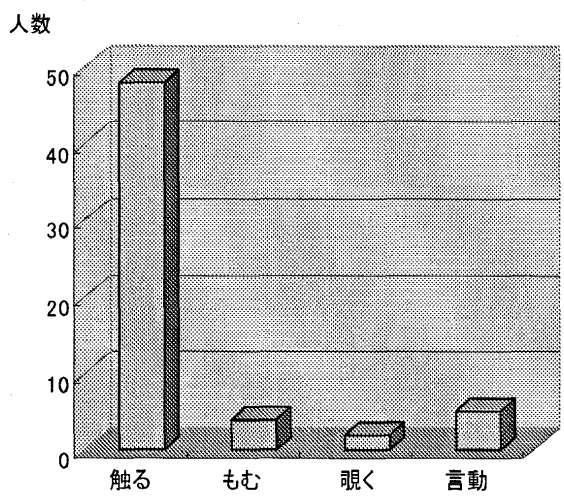

図２．園児から受けた胸に関する性的な言動・行動

具体的な記述内容は，表2のようになっていた。同じ触られた体験でも，『胸を触られた』『胸を触ってきた』という単純な言い回しのものもあれば，『遊び半分で胸を触られた』『胸にタッチして逃げていった』など園児が自分に関心を向けて欲しくてやったと思われるものもあった。

ごく少数ではあるが『頻繁に胸を触られた』『胸を触られ，やめてと言ったら逆におもしろがって余計触られた』など，同じ園児から繰り返し行われるものもあった。また，触るだけでなく，『おっぱいと言いながらもんだり触ったりする』とか，『無理矢理服を引っぱって胸を見る』など，他人にしてはいけない行動もあった。実際には，行動まで至っていないが『ブラジャーを見せてと言われた』ケースもあり，他人に言ってはいけない言動もあった。

他には，『なんで胸が大きいか聞かれた』『大人になったら胸が大きくなるのときかれた』など，小児と成人との違いについて素朴な疑問して尋ねているケースもあった。

表2．園児から受けた胸に関する言動・行動の記述内容

触る	48人	胸を触られた 胸をタッチされた いけないとわかって胸を触ってきた 遊び半分で胸を触られた 胸を軽く触られた 胸を触ってきた 複数で胸などを触られた 「おっぱい」と言って触られた 遊んでいる時に「おっぱい」と言って触られた 「先生におっぱいがある」と言って胸を触られた 胸にタッチして逃げていった 「先生のおっぱい」と言って頻繁に触られた 頻繁に胸を触られた 胸を触られ「やめて」と言ったら逆におもしろがって余計触られた 胸を触られ（「先生のおっぱいよりお母さんのおっぱいの方が大きい」と言われた） （無理矢理服を引っ張って胸を見て）胸を触った
もむ	4人	「おっぱい」と言いながらもんだり触ったりした 胸をもまれた　触られた 胸をつかまれた
覗く	2人	「見せて」と言って服を引っぱられた 無理矢理服を引っぱって胸を見て（胸を触った）
言動	5人	「ブラジャーを見せて」と言われた なんで胸が大きいか聞かれた 胸の大きさについて言ってきた 大人になったら胸が大きくなるのと聞かれた （胸を触られ）「先生のおっぱいよりお母さんのおっぱいの方が大きい」と言われた

（2）　性器に関する体験

性器に関する体験は全部で27人であったが，性器を触られた体験が大半を占めていた（21人）。具体的には，表3のように股間や殿部に軽く接触するものと，浣腸を真似たしぐさのものがあった。他には，男子学生が『性器を殴られる・蹴られる』という乱暴な行動を体験していた（4人）。また，『先生のおちんちんのところに毛がはえとるんじゃろ』とか，『「子どもを産んだら大人になれる？」と質問された』りしていた。この2つの内容については，前後の状況が把握できないためどのような意味を持つものかははっきりしない。

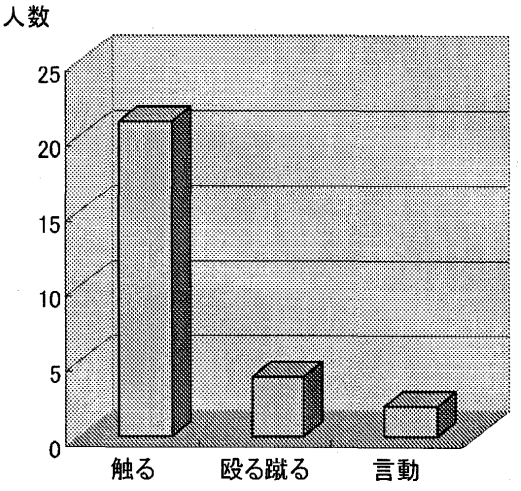

図3．園児から受けた性器に関する性的な言動・行動

表3．園児から受けた性器に関する言動・行動の記述内容

触る	21人	「ちんちん」と言って触られた 触られた 股を触られた 浣腸された 「おしり」と言って触られた おしりを触られた
殴る 蹴る	4人	性器を殴られた 性器を蹴られた たたかれた
言動	2人	「先生のおちんちんのところに毛がはえとるんじゃろ」と言われた 「子どもを産んだら大人になる？」と聞かれた

（3）　口に関する体験

口に関する体験（3人）は胸や性器に比べて少なく，『園児からキスをされた』体験（2人）と，『「先生キスしたことある？」と質問された』体験（3人）のみであった。

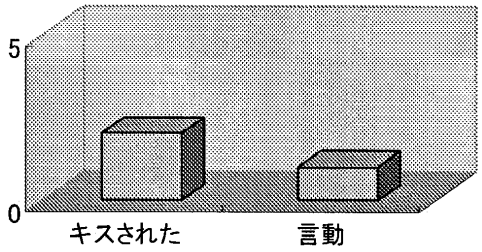

図4．園児から受けた口に関する性的な言動・行動

2）園児の行動への反応・対応

（1）　どのように感じたか

園児からプライベートゾーンを触られた時の思いについて，表4のような回答が得られた。

表4．園児の行動への感じ方（複数回答可）

嫌悪感	58	（人）
制止させたい	38	
漠然とした疑問	21	
驚　愕	17	
困　惑	8	
容　認	8	
怒　り	3	
園児の背景を予測	5	
その他	5	

最も多かったのが嫌悪感（58人）で，続いてその行動を制止させたい（38人）という思いの順であった。なかには，『どうして触ってくるんだろう？』『この子どうしたんだろう？』など疑問に思ったり（21人），家庭の様子について考えようとした学生（5人）もあった。相手が幼児といえども，プライベートゾーンを触られたことは嫌悪感をはじめとしたネガティブな感情が大半を占めていた。ごく少数ではあるが，子どもだから・・・と大して気にも止めず容認した学生（8人）もあった。

（2）　どのように対応したか？

子どもの行動に対する反応の仕方を，表5に示した。

表5．園児の行動への対応（複数回答可）

「やめて」と伝えた	50	（人）
「いやだ」と伝えた	36	
行動を制止した	26	
他の行動に置き換えた	16	
行動の意味の確認をした	11	
逃げた	4	
大事な所だから触らないでねと話した	5	
その他	7	

自分の思いを相手に返すために『「やめて」と伝える』『「いやだ」と伝える』という回答が圧倒的に多かった。（1）の回答にあったように，園児がなぜそういった行動をとるのかが気になった学生は，園児に向かって「どうしたの？」「どうして触るの？」など尋ねて確認してい

た。ただ単にその行動から『逃げる』という回答（5名）もあったが，「くすぐる」「だっこする」など『他の行動に置き換える』という回答（16人）が意外に多かった。性教育として適切な対応『大事な所だから触らないでねと話す』と回答した学生はわずか5人しかいなかった。

これらは，その場面でとっさに思いついたものであり，大半の学生が「それで良かったのか」と不安に感じていた。

4．考　　察

私たちは，今回初めてこのような調査をした。その結果が私たちの想像をはるかに上回る数値であり，大変驚いた。平成の子ども像は，私たち幼少期とはずいぶん変化したように感じるが，それはどのような要因によって引き起こされているのだろうか。

ひとつには，性に関する情報が氾濫していることが考えられる。諸外国に比べて我が国はメディアに対する規制が弱く，子どもにとってはいつでもどこでも目や耳から情報が入ってくる状態である。アニメやバラエティ番組でも，プライベートゾーンを露出して人を驚かせたり笑わせたりする場面が少なからずある。子どもたちは深く考えることもなく，興味本意でそれを真似することも多いのではないだろうか。

2つ目の要因として，乳幼児期は，興味の対象を確かめるために「触る」「口に入れる」のが特徴ということがあげられる。その意味では，悪意なく保育学生のプライベートゾーンを触った可能性が高い。就学前の発達段階では，プライベートゾーンに触ることがあっても，それは性的な意味が乏しいとする見解もある。しかしながら，他人の胸を触る行為は，母子間のアタッチメント形成過程にある意味とは異なっている。母親と離れているから他人のプライベートゾーンに触れると解釈することには無理を感じる。実際に園児に触られた学生の大半が，ひとりの人間として嫌悪感・怒り・驚き・困惑を感じていた。

3つ目は，性の健康教育は本来家庭内でも行われるべきものであるが，その親世代にはそれに関して十分な知識がないことがあげられる。我が国には，「性＝自然にわかっていくもの」と考える風潮があり，家庭でも学校でも一貫した教育がなされてこなかった。同様のことが，保育士にも言えるのではないだろうか。保育士は乳幼児期の日常生活に深く関わることから，関連する場面で大事なことを伝えるべきだが，親と同世代であることから性の健康教育の実践は，まだ難しいようである。保育士の中には，「子どものすることだから見過ごす」という意見の方も多く，あえて注目されていないような印象も受ける。

4つ目は，先述のように幼児に対する性的虐待の増加を考慮しておかなければならない。プライベートゾーンに関する行動は，園児が受けた行為であるという可能性もある。園児の行動・言動が執拗に繰り返される場合や，相手の意思を無視して自分本位に触るなどする場合は，愛情不足や性的虐待の被害にあっていることを裏付ける幼児からのSOSのサインの場合もある。すべてがそうであるとは言えないが，常に注意を払っておくことも早期発見には必要と思われる。

以上，保育学生が園児からプライベートゾーンに関する体験が多いことの要因について考察した。次に，保育学生の対応について考察していきたい。大半の保育学生が不快感や嫌悪感などを示しているものの，「大切な所だから触らないでね」という望ましい教育的な関わりはできていない。これは，保育学生が受けた性教育は，月経準備教育や性感染症予防という「医学中心の性教育」であり，より健康に生きるための「生教育」ではなかったことも関係しているのではないだろうか。また，幼稚園教育要領・学習指導要領を確認する限りでは，幼稚園・小・中・高での性の健康教育が系統的になされているとは言い難く，担当教員の裁量に委ねられている感が強い。本科の教育課程においては，私が担当する乳児保育の「おしめ交換」の単元で，陰部や殿部は大事なところだと強調している。しかし，それ以外の教科目では，プライベートゾーンに関する話題に触れることがない。つまり，就学前の子どもに対する性の健康教育のあり方をこの講義で初めて学習したことになる。

『大切な所だから触らないでねと話す』と回答した学生でも，講義を受講するまでは自分の対応が良かったのかどうかが不安で自信が持てなかったと述べている。

なかには，子どもに嫌われたくないためにじっと不快感に耐えていた学生もいたが，「口・胸・性器は，他人

が勝手に触れない部分である。他人が了解なしに触ろうとしたら，ノーと意思表示する，自分も相手の了解なしに触ってはいけない」ということを聞いて，園児にノーと言っても良いのだ・許されるのだという思いが強くしたように感じられた。保育職を目指す学生には，子どもに嫌われたくないとか，子どもの心を傷つけたくないという思いがある。これまで，ずいぶん我慢してきた学生もあったようであるが，我慢することが逆に子どものためにならないことを知って救われたようである。

近年の学生は，人間関係が希薄であるとかコミュニケーションが苦手であるといわれている。しかし，本科の学生は保育者を目指していることもあってか，よく相手を気遣っているように感じられる。特に，幼児の心が傷つきやすいことを学習していることもあって，対応のあり方に苦慮していた学生にとっては有益な授業となったことが確認できたように思う。

時代と共に，価値観や行動様式が大きく変容している。その中で，時代に即した性の健康教育を実践することは，生活習慣を身につけるのと同じように大事なことであり，決して避けては通れないものだと考える。ただ，性教育＝生教育と言われるほど奥が深く広範囲にわたる内容であることから，まず何を伝えるべきかを再度整理精選し，確実に実践できることを目標としたい。

お　わ　り　に

第2報では，授業後に行われた幼稚園実習で授業内容がどのように役立ったのかについて明らかにしていく。

引用・参考文献

1）メグ・ヒックリング，メグさんの性教育読本，木犀舎，2000
2）安達倭雅子，暮らしの中の性教育，北海道聞社，2000
3）頼藤和寛，お母さんの目からウロコが落ちる本－「平成っ子」の育て方に悩んでいませんか，PHP研究所，1996
4）杉山由美子，いまどきの女の子を育てる100のヒント，婦人生活社，2001
5）学校保健研究会〈ふきのとう〉，学校保健実践マニュアル，1996
6）岸井勇雄，幼児教育過程総論第2版，同文書院，2003
7）小野寺伸枝，助産婦さんのナイショ話，朝日ソノラマ，2000